

『アルキビアデス第一』における自己認識の構造

稲津阿育(首都大学東京)

『アルキビアデス第一』の第三部(124b7-135e8)において、ソクラテスは、アルキビアデスとともに、魂への配慮はいかになされるべきかであるかということを考察している。ソクラテスによれば、魂への配慮とは、まさにデルポイの碑銘「汝自身を知れ」がわれわれに勧告していることであり、われわれがわれわれ自身の魂を知ることにはかならない。

ソクラテスはこの、われわれ自身の魂を知るための方法について、視覚の領域にその類例を求めることによって説明している(132c9-133c7):目は、それ自身を見ようとするならば、目を眺めるべきであり、目のうちでも、目のよさ(ἀρετή)である視覚がやどる領域(τόπος)——ひとみ——を眺めるべきである。同様にして、魂も、それ自身を知ろうとするなら、魂を眺めるべきであり、とりわけ、魂のうちでも、魂のよさである知(σοφία)がやどるその領域——知性——を眺めるべきである。その領域は神に似ているのであり、その領域を眺め、神的なものの全体を認識することで、われわれは、われわれ自身をもっともよく知ることができる。

目と魂の類比について、とりわけ知られるべき自己の内容をめぐって、従来、対立する二つの解釈の可能性が示されてきた。神中心の解釈と、人間中心の解釈である。

神中心の解釈:われわれの自己認識は、われわれの内なる神的なものにのみかかわるのではなく、神にかかわる。あるいはむしろ、自己認識とは、神の認識である。この場合、自己認識は、客観的なものについての認識であり、personalな内容を含まない。

人間中心の解釈:われわれは、自分ひとりでわれわれ自身を知ることはできない。自己を知るために、われわれは、われわれをより客観的にみることが出来る他者(とりわけ友)との対話を必要とする。この場合の自己認識とは、自己を不完全な存在として認識することであり、personalな内容をもつ。

『アルキビアデス第一』には、実際にそれぞれの解釈を支持するテキストが多数含まれている。たとえば、神中心の解釈を支持するテキストとして、導入部(103a1-106c3)で言及される、ソクラテスの「何か人知を超えたものの反対(τι δαιμόνιον ἐναντίωμα)」からはじまって、同篇のクライマックスとも言うべき134cにおける、自己認識の終局の対象としての「神と賢慮(θεόν τε καὶ φρόνησιν)」への言及などを挙げることができる。

他方で、人間中心の解釈を支持するテキストとしては、とりわけ対話(διαλέγεσθαι)という営みへの言及を挙げることができる。導入部にかぎっても、まさに「何か人知を超えたものの反対」がそれまでソクラテスを制止してきたところのものとして、アルキビアデスとの対話がたびたび言及される(105d6, e7, 106a1, cf. 103a4)。また第一部(106c4-119a7)の議論の過程で、ソクラテスが、アルキビアデスに対して、対話の構造についての自覚的な反省をうながす場面がある。対話において、そこで展開される議論にコミットしているのは、問い手ではなく、答え手である(112e1-113c7)。対話は、真理への共通の探求としてなされるとしても、そのつどの対話において吟味されるのは、答え手の考えである。こうした

問い手と答え手との峻別は、対話という営みのもつ personalな側面をあきらかにしている。

したがって、知られるべき自己の内容をめぐり、神中心の解釈と人間中心の解釈の対立は、何らかの調停を必要とする。実際に、近年は、相対立するこうした二つの解釈を調停する方向で研究が進められている。

本発表では、この問題に対して、従来の研究において十分に考慮されてこなかったある視点からの調停を試みる。それは、この対話篇の導入部において、ソクラテスの所有する、「君(アルキビアデス)の仕事と君にかかわる力(δύναμιν ... εἰς τὰ σὰ πράγματα καὶ εἰς σέ, 105d4-5)」として言及され、第三部の議論の最後の局面(133c18-135d8)で、「自分自身(αὐτόν)」、「自分自身にかかわるもの(τὰ αὐτοῦ)」、「自分自身にかかわるものにかかわるもの(τὰ τῶν ἑαυτοῦ)」を扱うものとしてふたたび言及される、あるテクネー(μία τέχνη, 133e1)にかかわる問題である。

第三部のそれまでの議論において、τὰ αὐτοῦ, τὰ τῶν ἑαυτοῦ はそれぞれ、身体および、靴や衣服など身体の世話をするためのものを意味していた。そのことに応じて、これらは、医術や、靴の制作にかかわる技術などの対象とみなされてきた。しかし第三部の最後の局面において、αὐτόνのみならず、τὰ αὐτοῦ(τὰ τῶν ἑαυτοῦ は、第三部の最後の局面では、τὰ αὐτοῦに集約されている)もまた、ひとつのテクネーの扱う対象とされる。αὐτόν, τὰ αὐτοῦが、それぞれ別のテクネーの扱う対象ではなく、ひとつのテクネーの扱う対象であるとすれば、これらは全体として一つの領域をなしているはずである。しかもその領域とは、まさにわれわれ自身(αὐτόν)にかかわるものであるはずである。

われわれ自身にかかわるこのテクネーとは、魂の配慮としての、ソクラテスの哲学の方法そのものである。そして『アルキビアデス第一』の議論全体は、ソクラテスがアルキビアデスにたいして、このテクネーの伝授を試みるというかたちで、このテクネーを中心にして構成されている。

そこで本発表では、先の調停を試みるにあたって、同篇の全体を、このテクネーがいかなるものであり、何を対象としているのかという点に焦点を当てて読み解く。発表者はとくに、このテクネーが、ただαὐτόνを扱うだけでなく、τὰ αὐτοῦにもかかわるとされている点が重要だと考える。「自分自身のこと(τὰ αὐτοῦ)」は、第一部および、第三部の前半(124b7-127e8)において、「正義にかなったこと(τὰ δίκαια)」と結び付けられている。このことは、自己を知ることが、τὰ δίκαιαの認識と、切り離しえないということを含意する。

われわれは、ひとつひとつの行為の場面で、それがそのつど「正義にかなったこと」であるかどうかを問われざるを得ない。「正義にかなったこと」が、「自分自身のこと」すなわち自己にふさわしいことであるとすれば、われわれにとって、自己とは何かということは、ひとつひとつの行為の場面において、あるいはそこにおいてこそ問われるべき問題である。

自己とは何かということは、τὰ δίκαιαという、規範的であり客観的なものにかかわりつつも、それぞれの行為の場面において問われるべき問題としてある。そのかぎりでは、自己認識は、それぞれの行為の主体である、個としてのこのわたしの生の全体にかかわる。本発表では、こうした解釈の提示を試みる。